ふるさと再発見シリーズ７

# 白老　神社と祭礼

はじめに

　郷土白老の歴史や文化を多くの方に知ってもらうため、「ふるさと再発見シリーズ⑦」では、各地域に根ざしている祭と、その舞台となる神社について紹介します。

　郷土にとっての神社は信仰の対象であるだけでなく、定期的に催される祭礼を通じて人々の繋がりを強め、モノや情報の交流を促し、長い年月をかけて継続されることで様々な地域色を生み出すなど、私たちの暮らしとその変せんに深い関係を有しています。

　本誌を通じて、郷土の多様な歩みの一端に触れていただければ幸いです。

**本誌で紹介する神社と祭礼（掲載順）**

**社台稲荷神社（しゃだいいなり）　白老八幡神社（しらおいはちまん）　愛宕神社（あたご）　塩釜神社（しおがま）　萩野神社（はぎの）**

**北吉原八幡神社（きたよしわらはちまん）　竹浦神社（たけうら）　虎杖浜神社（こじょうはま）**

写真：塩釜神社の例大祭の日に陣屋跡で披露される「虎杖浜越後盆踊り」

# 社台稲荷神社（しゃだいいなりじんじゃ）

明治 13(1880)年に京都市伏見区の稲荷神社より豊受姫神を祭神として勧請し、創建された神社です。「ウカ」や「ウケ」は豊穣を表し、京都の伏見神社は「衣食住の太祖にして万民豊楽の神霊」と崇められています。

郷土史家の故塚見秋夫氏の『社台稲荷神社 120 年史』に拠(よ)ると、社台で地引網漁を行っていた相木林蔵が、網に掛かったお米の形をした石を祠に祀ったことが始まりのようです。社殿を建立する際、石は稲荷神社のご神体として祀られるようになりました。

国道 36 号線が 2 車線に拡幅される前の神社。南側には昭和 11(1936)年、旭川の第七師団と弘前の第八師団が合同で行った陸軍大演習を記念した石造りの鳥居があった。

現在の社台稲荷神社。

呑香神社とも呼ばれ（「どんこ」、「どんこう」、「とんこう」など呼び方に地方差がありますが、社台稲荷神社は「どんこう」と呼ばれています）、岩手県二戸市に鎮座する呑香(とんこう)稲荷神社と関わりがあると言われます。

また、社台の浜にあった石造りの祠には「呑香龍神」が祀られており、塚見氏に拠ると、8 月 18 日の祭典には草相撲など地域ぐるみの行事が行われていたそうです。

| 品名 | 奉納者氏名 | 奉納年月日 |
|---|---|---|
| 正一位稲荷大明神 | 小田島梅吉 | 明治27年9月吉日 |
| 福寿海 | なし | 不詳 |
| 馬 | なし | 明治20年6月27日 |
| えびす大黒 | なし | 不詳 |
| 七里が浜之島遠望 | 相木 | 不詳 |
| 馬 | なし | 明治25年6月20日 |
| 船 | 不詳 | 明治22年正月24日 |
| 鳥井と白狐 | 千石熊吉 | 明治21年8月15日 |
| 鳥井と白狐 | 相木林蔵 | 不詳 |
| 船 | なし | 明治22年正月20日 |
| 船 | 菊地 | 明治28年8月 |
| 賽銭箱 | 森野信次郎 | 明治28年9月吉日 |

社台稲荷神社の奉納品一覧『社台稲荷神社120年史』塚見秋夫氏著 より引用

岩手県二戸市福岡鎮座の呑香稲荷神社（呑香社HPより転載）。

昭和後期の神社内観。社殿には10点以上の絵馬が奉納されており、明治20年代のものが大半を占める。

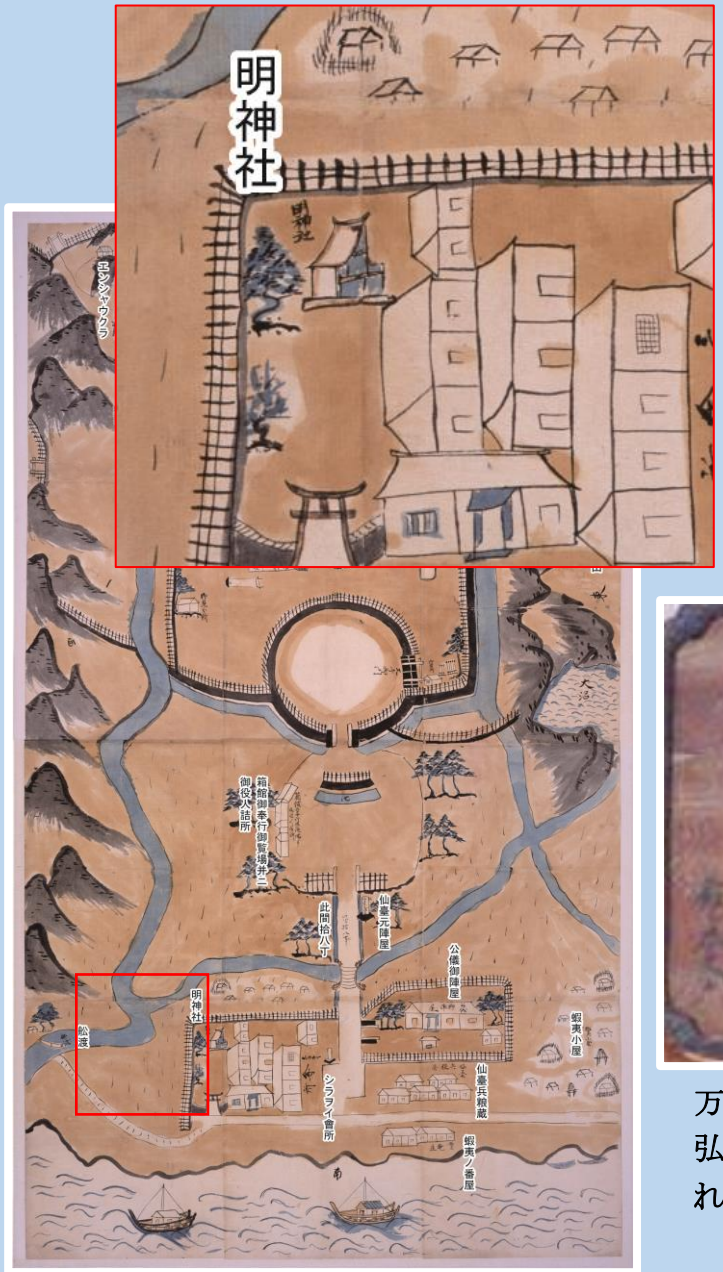
土俵造成の一幕。詳しい年代は不明だが、社殿の形状は、昭和47(1972)年に改築される前のものであることが分かる。

取材に協力いただいた方々（順不同）
仙田公昭氏、中出満氏
※お祭りに関する思い出話や写真を募集しています。

# 白老八幡神社（しらおいはちまんじんじゃ）

白老八幡神社の前身は、近世期の白老会所の一隅に建てられていた弁天社（明神社）です。寛政 10(1798)年の記録には登場していますが、創設の年代ははっきりしていません。白老場所の請負人であった野口屋又蔵が万延元(1860)年に誉田別尊（ほんだわけのみこと）を勧請し、八幡社を称するようになりました。明治８(1876)年には開拓使が郷社に指定し、豊受大神（とようけのおおかみ）を合祀（ごうし）します。

同社では元禄元(1688)年作製の銅鈴、弁天社の頃に奉納された絵馬や扁額（へんがく）が残されており、絵馬と扁額は本町の有形民俗文化財に指定されています。




安政４(１８７５)年作製の「仙台藩白老陣屋之図」。白老川沿いに明神社が描かれている。

万延２(1861)年奉納の絵馬「三番叟（さんば）像」（上）と、弘化２(1845)年奉納の扁額「四季歌」（下）。いずれも平成８(1996)年に有形民俗文化財に指定。

白老八幡神社例大祭の一コマ。詳しい年代は不明だが、昭和後期と思われる。

昭和 29(1954)年度の例大祭（左）と昭和 53(1978)年度の例大祭の一コマ。

白老八幡神社の例大祭は、以前は９月 14 日から 16 日にかけて実施していました。稚児行列や祓行列の衣装は 50 組ほどあり、各地の神社へ貸出しもされていました。稚児衆に参加する児童が次第に減り、昭和 50 年代を境に行われなくなったそうです。

稚児行列が行われていた頃、本神輿の後には、各町内会からの参加者や子供神輿の列が 300m も続いたとのこと。行列は神社から西進し、陣屋通りの踏切を渡ります。それでも後続の一部は、まだ神社の境内に残っていました。神輿行列はポロトをいったんの終着点とし、各町内会はそこで解散となりました。

本神輿はその後も町内を練り歩き、緑丘や緑町も巡ります。全ての「御旅所」を訪れるだけで一日がかりでした。子供の人数が次第に減り、「御旅所」の数も減っていきましたが、当時の様子を知る人は、「昔の方が盛大だった」と感じているそうです。八幡神社の鈴木琢磨宮司は、行事が地域と神社の間で共有される「祭らしい」光景だったと、当時を振り返っています。

白老八幡神社が所有する本神輿は、全道から600人が担ぎに来た時代もありました。全道各地の有志が、それぞれの神輿会の袢てんを着て神輿を担ぎました。気分が高揚しての喧嘩沙汰も珍しくなかったそうですが、八幡神社では神輿行列からよさこい群舞へとイベントをシフトすることで対策しました。不満も多少は出ましたが、神輿会の人々は神社の意向をきちんと尊重し、イベントのシフトは特に支障なく進んだそうです。

平成7(1995)年度の例大祭。大町商店街を埋め尽くす神輿行列と見物客。懐かしい商店も多数写りこんでいる。

取材に協力いただいた方
鈴木琢磨氏

# 愛宕神社（あたごじんじゃ）

安政３(1856)年に白老元陣屋を造営した仙台藩士は、曲輪(くるわ)の東西を守る舌状台地にそれぞれ国元から神社を勧請(かんじょう)しました。

東側の舌状台地に奉られた愛宕神社は愛宕権現(ごんげん)を祭神とし、仙台総鎮守として崇拝されています。総本山は京都の愛宕山にあり、火防の神様として知られますが、天狗信仰や塞神(さいのかみ)信仰とも深い関わりを持ちます。

現在の社は後年のものであり、当時の様子がどのようであったかは分かっていません。文久元(1860)年に幕府から、白老などが仙台藩領として認められ、これを記念して奉納した石灯籠の一部が現存しています。

左の写真は平成 25(2013)年度の例大祭。平成30(2018)年の胆振東部地震で倒壊したため、現在は新しい社が設けられている。

昭和 50 年頃、陣屋跡近在の住人が中心となり、愛宕神社奉賛会を結成します。当時大昭和製紙白老工場の構内にあった春日大社の祠を譲り受け、例大祭を挙行するようになりました。愛宕権現の縁日にあたる 24 日にちなみ、毎年６月 24 日に例大祭が挙行されています。

# 塩釜神社（しおがまじんじゃ）

陣屋跡の西側の舌状台地に建つ神社は、宮城県塩釜市に鎮座する塩釜神社から祭神を勧請しました。武功や海難除けの神様を祀り、藩士の国元では「奥州一之宮」として崇拝されています。

現在の社は後年のものであり、明治・大正・昭和と、３回にわたり改修されています。当時の社がどのようであったかは不明ですが、とある記録では藩士が勧請した頃の礎石が残るそうですので、次に改修するときには新しい発見があるかもしれません。

神社の麓（ふもと）には、文久元(1860)年に奉納された石灯籠が、一部補修はしているものの、奉納した藩士の氏名まで読み取れる状態で残っています。

昭和 40 年代の例大祭の一コマ〈上〉。平成 20(2008)年度の例大祭に向けた準備の様子。保存会の手作りによる笹団子が振舞われた〈下〉。

国元の塩釜神社では例大祭を 7 月 10 日と定めており、白老へ詰めた藩士たちへも「赤飯と酒」が振舞われていました。

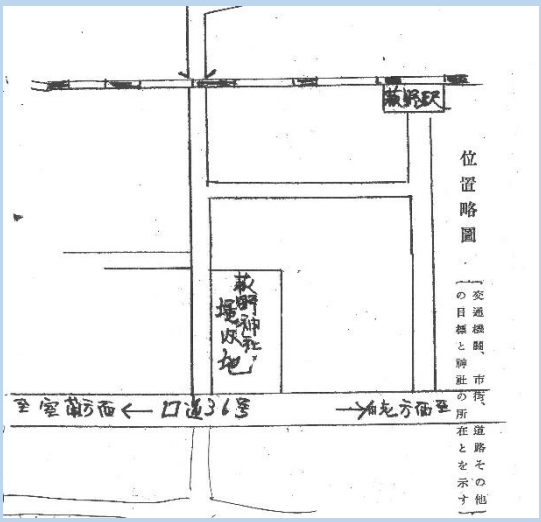
藩士の撤退後は明治 40 年代に発足した「青葉会（史跡指定を契機に「白老仙台陣屋史跡保存会」へ改称）」が主催する祭礼となり、例大祭は会員の生業との兼ね合いから 8 月 10 日に変更されました。

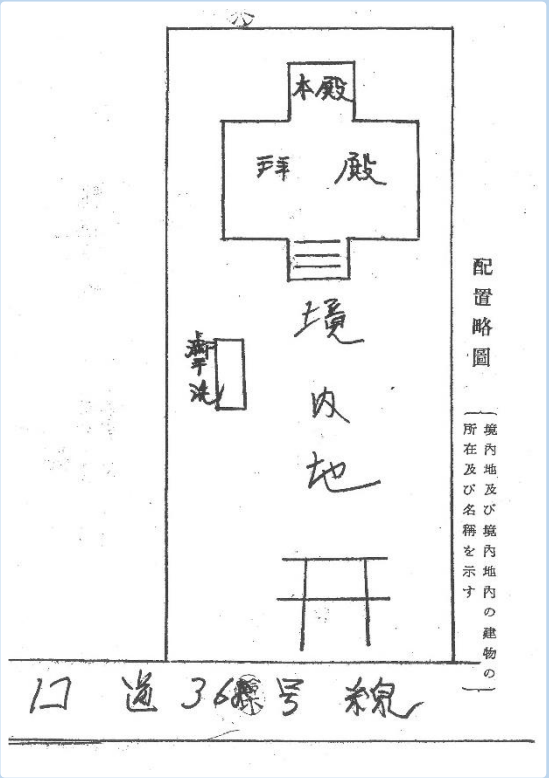
境内には土俵が設けられ、昭和 50 年頃までは勧進相撲が催されていました。保存会会員であった方の話によると、「浜からアイヌ民族の子供たちを年に一回陣屋まで呼び、一緒に赤飯や田楽を味わっていた」そうです。

# 萩野神社（はぎのじんじゃ）

萩野神社の歴史は明治 45(1912)年、京都市伏見区鎮座官幣大社伏見稲荷から祭神を勧請したことが始まりとされています。当初は豊受大神を祀っていましたが、大正 10(1921)年に千葉県にある佐倉宗五郎霊社から分霊を招き、さらに昭和 36(1961)年の宗教法人化に伴い天照大神を増祀したため、現在では３柱を祀っています。

もともとは現在の「萩の里自然公園」中腹に社殿があったとされ、農林業が生業の人々を中心とした祭が行われていました。近年までの例大祭は８月 25 日でしたが、現在では８月の第四日曜日に改められています。




国道沿いにあった頃の社殿の位置と見取り図。

昭和後期の例大祭の一コマ。
白老斎場のエントランスに貼られていた写真。

例大祭一コマ。
神輿は「魂入れ」の後、町内会毎に担がれる。

神社が「萩の里自然公園」の山中にあった頃、付近はシレトコと呼ばれていました。昭和６(1931)年４月、次第に戸数が増え、例大祭への参加者も増えましたが、立地的に利便性を欠くことから、十二間道路の入口にあった坂口氏所有の敷地を借りて遷移します。

昭和 18(1943)年に一帯が萩野と改名されて現在の名称になるまで、「知床神社」の名で、農家・漁家合同により護持されてきました。

現在地への遷移は昭和 45(1970)年のことで、国道付近の都市計画や周辺の人口が増えたため、例大祭の挙行に支障が生じるようになったことが背景のようです。

現在地へ移転後の社殿。平成初期撮影。多くの屋台が並び盛況に行われていた。

社殿前に整えられた土俵。
例大祭本祭で執り行われる子供相撲の場面。

萩野神社の例大祭に催される奉納相撲は、地域の歩みと深い繋がりがあります。

現在の社会福祉法人ホープの道路向かいには「ガーデンスズキ」というホテルがあり、関取の地方巡業に際して利用されていました。また、萩野生活館が建つ土地も所有しており、敷地内には土俵が設けられていたそうです。

かつての氏子には巡業相撲と縁のある方が多く、現在地に社殿が遷移してからも地域の行事として続けていこうとする思いが根付いていたようです。

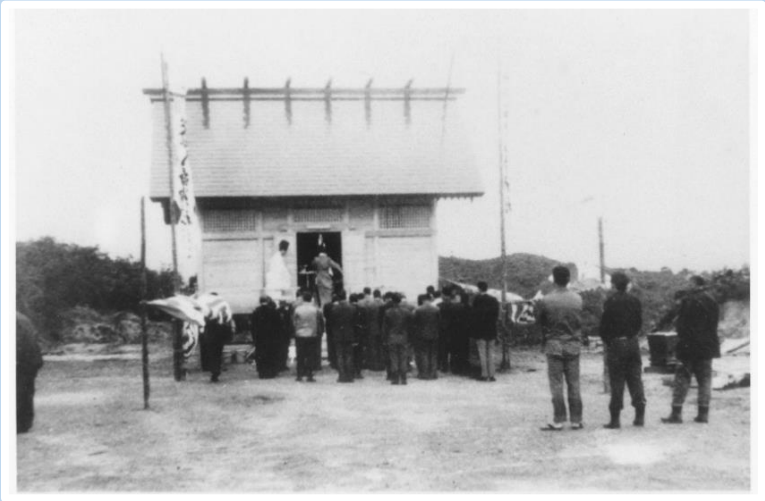
萩野神社の例大祭は、氏子衆が土俵作りを担うのも特徴とのこと（他の地域は相撲協会主体）。土俵作りは祭日の朝から氏子が集まり、午前中の祝詞奏上や正午からの神輿への「魂入れ」の合間を縫って整えられるそうです。

取材に協力いただいた方々（順不同）
近藤守氏、松本功氏、寺内康雄氏
三河伸雄氏、吉田末治氏

# 北吉原八幡神社（きたよしわらはちまんじんじゃ）

明治 25(1892)年に建立された神社で、当時は地域の字であった敷生八幡神社という名称でした。昭和 14(1939)年の字名改正により萩野八幡神社となり、同 51(1976)年に現在の名称となりました。

祭神は白老八幡神社から勧請していますが、古くは寛保年間(1741～43)の渡島大島の噴火に際し、地域のアイヌ民族が津波から逃れるために避難し、「カムイがいる所として祠(ほこら)を建立した」という伝承も残っています。



昭和 42(1967)年 9 月、現社殿の落成式。

現日本製紙構内にあった社殿と例大祭の一コマ。
男性は炭で顔に化粧を施していた。

萩野八幡神社の頃、社殿は現在の日本製紙白老工場の敷地内にありました。

工場建設にあたり移転の要請があったため、当時の氏子総代が地域との協議を重ね、新社殿の建築費を会社側が負担することを条件に、現在の場所へ移遷しました。

昭和 41(1966)年の大風(おおかぜ)により社殿が全壊した時もまた、新設の費用を工場が負担しています。さらに、同 56(1981)年８月には、社殿階段下の第一鳥居が工場からの寄贈により建立されました。現在でも例大祭の当日には、工場が用意するバスにより、関係者の送迎が続けられています。

例大祭は９月４日（現在は９月最初の土・日）で、明治 14(1881)年に明治天皇が北海道を巡幸し、当地で萩の花を愛でたことを記念して定められました。

例大祭の当日は北吉原生活館に集合後、日本製紙工場のバスに乗って北吉原神社へ向かいます。鉄北側から神輿行列が練り歩き、北吉原地区の中通が行列の終点となります。道中では10ヵ所以上に「御旅所」が設けられ、各所で祝詞奏上（のりとそうじょう）とお祓（はら）いが行われます。

昭和末期、日本海側のニシン漁を経験していた漁師の発案が実現し、従来の神輿に加えて舟神輿（ふなみこし）が導入されました。漁具のモッコには溢れそうな量のお賽銭が集まったそうですが、現在でも「出店がなくても人が集まる」祭礼で、北吉原地区以外からの参加者も多いそうです。

舟神輿が行われなくなった一方、平成中期からは萩野中学校（現白翔中学校）の吹奏楽部が神輿行列に加わっています。学校からの送迎は日本製紙工場のバスが担っており、地域を超えた連携が、氏子衆の熱意と混ざりあい、祭礼の継続と盛況を支えていることが伺えます。大漁旗から仕立てた法被（はっぴ）でよさこいを踊るなど、地域の特色や工夫が色濃く現れています。

実際の磯舟を利用した舟神輿。

「おたび所」での祝詞奏上とお祓い。袴や一部の衣装は白老八幡神社から借用していた。

平成 10(2008)年の例大祭で撮影。
法被にも「大漁」の文字が見える。

取材に協力いただいた方々（順不同）
新山初太郎氏、福澤孝宏氏

# 竹浦神社（たけうらじんじゃ）

昭和９(1934)年 10 月、当時の敷生村に建立された敷生神社は、同14(1939)年の字名改正により、現在の社名へ改められました。

建立にあたっては、竹浦在住の個人より、2,046㎡の土地が寄進されています。祭神は北海道神宮（当時は「札幌神社」）から勧請しており大国魂神（おおくにたまのかみ）、大那牟遅神（おおなむちのかみ）、少彦名神（すくなひこなのかみ）を奉っています。

昭和57(1982)年、道央自動車道の延伸に伴い建設範囲と重なっていた社殿が移築・新築となり、「竹浦神社造営奉賛会」が組織されました。

例大祭は７月最終の土・日曜日に定められています。

現在の竹浦神社社殿（上）。
境内前に据えられた由来を記した石板（下）。

取材に協力いただいた方
鈴木靖男氏
※お祭りに関する思い出話や写真を募集しています。

竹浦神社は境内が狭かったこともあり、例大祭の演芸などは小学校の敷地を利用していた時代がありました。

昭和末期、境内東側の土取跡地が放置されていたため、有志が集まって雑木の伐採などを行いました。

以降は露店や演芸会場として活用され、荷台が舞台にもなる大型車が無償で提供されるなど、例大祭の賑わいが一変したそうです。

竹浦神社では大小２基の子供神輿を所持しており、参道の東西で神輿行列の範囲が分かれるそうです。東側は飛生地区を含み、西側は金刀比羅（こんぴら）神社の辺りまで巡ります。

金刀比羅神社は国道沿いにあり、浜竹浦の漁師が中心となって維持管理されています。

# 虎杖浜神社（こじょうはまじんじゃ）

虎杖浜神社は明治 30(1897)年に建設された当初、稲荷神社と称していました。白老町史では、京都市伏見区官幣大社稲荷神社から祭神をしたことが紹介されています。

クッタリウスには漁明（すなどり）神社も祀られていたのですが、昭和 29(1954)年の台風により倒壊します。漁明神社の氏子も稲荷神社の氏子となり、これを期に虎杖浜神社と改称することとなりました。

虎杖浜神社前で撮影された集合写真。幟に「稲荷大明神」とある。

国道 36 号が札幌本道と呼ばれ、神社の前に敷かれていた明治 14(1881)年、明治天皇が北海道を巡行し、その道中で白老を通過しました。虎杖浜には休憩所が設けられ、これを記念した駐蹕（ちゅうひつ）碑が現存しています。

また、郷土史家の故高田寅雄氏が著した『ふるさとアヨロ』では、神社の境内から時化の訪れを知らせる狼煙（のろし）を上げていた故事が紹介されています。

令和２(2020)年に改築した現社殿と鳥居。
春分・秋分の日の出に向かい設置した。

虎杖浜神社の例大祭では、海岸通に屋台が並びました。次第に人口が減ったことで、屋台はアヨロ温泉前の駐車場だけになりました。各町内会の神輿のほかに子ども神輿があり、子ども神輿は海岸通限定で巡回します。このとき、保育所や児童によるよさこい演舞が披露されます。

よさこい演舞は平成に入った頃から登場しました。かつては吹奏楽団の行列が子供の出し物だったのですが、児童の減少を受けて代わりの催しが模索された結果、ちょうど札幌の「YOSAKOI ソーラン祭り」が話題となったこともあり、虎杖浜でも取組むようになったそうです。子ども用の法被は古くなった大漁旗を利用して作られています。

虎杖浜神社の例大祭。平成初頭と思われる。

虎杖浜の例大祭では、本神輿はトラックに乗せられて巡回します。やや古いため担げないので、平成初期頃に青年山車が作られました（魂入れはしない）。

例大祭の役職は町内会持ち回りで分担します。祭典全体を取仕切る神社係、神輿係、幟係、余興係、天狗役などがあります。以前の余興は町内会対抗のソフトボールが、現在はパークゴルフが行われています。

虎杖浜ではお盆にも地域色豊かな催しが継続されています。

越後踊り保存会による盆踊り、灯篭流し、花火大会が催されます。灯篭は全町内会から集められ、アヨロ川に流されます。

取材に協力いただいた方々（順不同）
吉良規克氏、南昌宏氏、本間正志氏
鈴木研氏、渡辺正明氏

編集・発行　仙台藩白老元陣屋資料館（白老町教育委員会）
発 行 年 月　令和５(2023)年３月
問　合　先　仙台藩白老元陣屋資料館
〒059-0912　白老郡白老町陣屋町 681-4
TEL(FAX 兼)　0144-85-2666
E-mail jinya@town.shiraoi.hokkaido.jp

写真：白老八幡神社の例大祭で奉納される子供相撲の指導場面